

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：32601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652144

研究課題名(和文) 文脈を大切にした小学校英語教育 ストーリーを中心にしたカリキュラムの開発

研究課題名(英文) Elementary English Education in Meaningful Contexts -- Developing a Story-Based Curriculum

研究代表者

アレン・玉井 光江 (Allen-Tamai, Mitsue)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：50188413

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、学びを育てる英語教育プログラムとして「Story-Based Curriculum」を開発し、その効果について量的、質的に研究することを目的としている。ストーリーを中心にしたカリキュラムは大きくstorytelling, joint storytelling, storyに関連する活動、readingに分けられ、この順番で進めた。

量的には語彙習得について検証したが、語彙の受容知識が統計的に有意に伸びていた。また、音声言語についても言語産出力が有意に変化していた。

質的研究では、アンケート、インタビューより、児童が学習の達成感を強く感じ、自律した学習者に育っていくことがわかった。

研究成果の概要(英文)：The goal of this research is to develop a learning-centered curriculum using stories. The Story-Based Curriculum, a holistic approach to teaching English through stories, shares pedagogical principles with the Whole Language Approach, Content-Based Approach, and Activity-Based Approach. Learners first listen to a story and then they are taught to retell the story with a simplified manuscript which comprises rhythmic lines and songs. Finally, the written manuscript is given to the learners and they start reading it by using their gained orality.

The vocabulary tests verify that students developed their receptive vocabulary knowledge and reading ability. Their syntactical knowledge was also developed. Their oral language was also measured individually before and after the treatment. There was a statistically significant difference in their oral development. The qualitative data shows that the curriculum enhances the students' motivation and develops their tolerance of ambiguity.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校英語 音声言語の発達 ストーリーテリング リテリング活動 内容重視の言語教育

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した 2011 年度は小学校で現行の学習指導要領が完全導入された年であった。高学年の児童に対し必修科目となった「外国語活動」が始り、その目標は「外国語を通じてコミュニケーション能力の素地を養う」こととされた。教科ではない外国語活動では外国語のスキルを身に付けることは二義的なものとされ、明確な学習目標を設定することは難しい。

研究代表者は楽しく親しむだけの外国語活動ではなく、learning-centered の英語学習を目指すことが必要だと考え、言語スキルを伸ばすことも目標に含め、高学年児童の興味・関心を高めるカリキュラムの開発を進めている。言語習得には「意味のある文脈 (meaningful context)」の中での言語との接触が不可欠であり、それがないところでは本当の言語習得はおこらない。週に 1 度しかない外国語クラスにおいて、どのように「意味のある文脈」を創造するのかが、大変難しい問題である。研究代表者は物語を教材にすることによってそれを可能にしようと試みた。物語が作り上げる文脈の中で児童は知らない単語の意味を想像し、語彙力や表現力を養っていき、母語教育においても頻繁に使われる物語を外国語教育においても主たる教材として使用するカリキュラムを考えた。言語材料として物語を使用する利点はたくさんあるが、中でも物語の中にある (1) 繰り返しとコントラスト、(2) 豊かな言語表現、(3) 文学性と文化性が特に優れた点である。以上のような理由から児童の学びを育てる英語教育を進めるため文脈を大切にしたいストーリー中心のカリキュラム (Story-Based curriculum: これ以降 SBC) を開発することにした。(アレン玉井, 2010)

2. 研究の目的

子どもを対象とした第二言語教育における文脈の大切さについては、Whole Language Approach (Goodman, 1971, Freeman & Freeman, 1992), Content-Based Approach (Snow & Brinton, 1997), Activity-Based Approach (Vale & Feunteun, 1995) など繰り返し述べられている。

まずは、上記の考え方にに基づき、文脈を大切にしたい英語教育カリキュラムを作成することが第 1 の研究目的であり、次に開発したカリキュラムを実際に公立小学校の高学年児童に実施し、その効果を検証することが第 2 の研究目的である。

3. 研究の方法

(1) カリキュラム開発

第 1 の研究目的を果たすため、十分な文献研究の後 SBC を開発した。このカリキュラムは次のような順番で行われる。

Storytelling (listening 活動)

先生はお話を語り、児童はお話を聞く。

Joint Storytelling (speaking 活動)

1 回の授業で 7~10 分程度行い、それを 15~20 回続ける。台本は英語のリズムを大切にしたいもので、手話やジェスチャーを取り入れ、児童が記憶しやすいように工夫している。

お話に関連した活動 (内容重視の活動)
お話に関連した活動を準備する。児童は活動を通して英語を学習する。

読みの活動 (literacy 活動)
音声言語が十分に発達した後、適切な時期に原稿を渡し、児童は読む練習をする。

(2) カリキュラムの検証

次のような手法でカリキュラムの効果を検証した。

研究参加者

研究の対象となる小学校は教育課程特別校であり、児童は第 1 学年より週 1 回の英語を教科として受けている。積極的に小中連携を進めていることもあり、英語科では「9 年間を通して「聞くこと」「話すこと」を中心とした一貫性・系統性のある実践的・実用的コミュニケーション能力の育成に重点を置いている。研究の参加者は当該小学校の 6 年生 75 名 (2012 年度卒) と 56 名 (2013 年度卒) である。

検証に使用したテスト

研究代表者は単語および表現の受容的理解を測るテストを開発した。児童は単語や表現を聞いて 4 つの日本語の意味から正しいものを選ぶというものである。また、ポストテストでは、単語や表現の正しいスペルを選ぶ問題も追加した。さらに文を聞いた後に、与えられた単語を正しく並び替え、文を作成する問題も追加した。例えば I have to sell our cow. という文を聞き、児童はその文に相当する意味を (A. 牛が売れない, B. 牛を売らなければならない, C. 牛を売りたい, D. 牛が好きだ) の中から選び、さらに次のように書かれている語 (語句) ⑦ have to ① our ② we ③ sell ④ cow を正しく並び変え (⑦, ②, ③, ①, ④) と解答欄に書くというものである。

さらに SBC を通して獲得する音声言語の発達を測るため、Joint Storytelling の活動の 2~3 回後と 20 回後に児童の音声を個別に録音し、比較分析した。

研究手順

SBC のスピーキング活動である Joint Storytelling の前後に単語のテストと個別の再話テストを行った。

4. 研究成果

(1) カリキュラムの開発

前述した ~ の SBC 活動を行うために必要な教材を次のような物語を素材として開発し、出版した。

(低学年用)

- The Hare and the Tortoise
- The Ant and the Grasshopper
- Momotaro

- The North Wind and the Sun
- The Gingerbread Man
- The Little Red Hen
(中学年用)
- The Three Billy Goats
- The Three Little Pigs
- Goldilocks and the Three Bears
- The Mitten
- Bremen Town Musicians
- Urashimataro
- The Big Turnip
(高学年用)
- The Little Red Riding Hood
- Jack and the Beanstalk
- Aladdin and the Magic Lamp
- Hansel and Gretel

(2) カリキュラム検証 (量的研究)

受容的語彙理解の変化

2012 年卒業の児童は「ジャックと豆の木」を通して英語学習を進めた。表 1 は児童の受容的語彙理解の変化をプレテストとポストテストで表したものである。

表 1 ジャックと豆の木の受容語彙検証

	人数	平均	標準偏差	信頼度
プリ	73	9.40	2.73	.67
ポスト	73	11.86	2.54	.70

信頼度が若干低いのは項目数が 14 しかなかったことが原因である。Matched *t*-test を行った結果、 $t = 6.785$, $df = 72$, $p = .000$ と統計的な有意差があることがわかった。効果量は $= .90$ と大きな効果があったことがわかった。

2013 年卒業の児童は「赤頭巾」を通して英語学習を進めた。表 2 は児童の受容的語彙理解の変化を表したものである。

表 2 赤頭巾の受容語彙検証

	人数	平均	標準偏差	信頼度
プリ	50	8.56	2.60	.61
ポスト	50	12.62	2.58	.76

信頼度が若干低いのはこのテストも項目数が 15 しかなかったことが原因である。授業中のテストであることや、児童の負担感を考えると数的にこの程度の項目数を行うのが限界であった。Matched *t*-test を行った結果、 $t = 9.059$, $df = 48$, $p = .000$ と統計的な有意差があることがわかった。効果量は $= .56$ と中程度の効果があったことがわかった。

これら二つの結果より、児童は物語を通して物語に出てきた単語や表現についての受容的な理解を深めていたことがわかる。またポストテストだけで行った単語の並べ替え問題では、80%を通過点として計算したところ、2012 年度生は全体の 38.4%の児童が合格し、2013 年度では 78%が合格していた。

音声言語の発達

2013 年度の卒業生に対しては Joint Storytelling が始まって 6 回目と 20 回目の後に児童を別室に呼び、個別に再話をしてもらった。それらを全て録音し、形態素レベルで再生されているかどうかをチェックし、点数化した。表 3 がその結果である。

表 3 赤頭巾の再話検証

	人数	平均	標準偏差	信頼度
プリ	45	108.75	67.46	.99
ポスト	45	215.17	41.05	.99

形態素は全体で 250 あったため信頼度が高いテストとなった。Matched *t*-test を行った結果、 $t = 14.18$, $df = 44$, $p = .000$ と統計的な有意差があることがわかった。効果量は $= .58$ と中程度の効果があったことがわかった。

他の言語スキルとの関連

2013 年度の卒業生に対して行った他のテストとの関連を調べた結果が表 4 である。

表 4 再話の力と他の言語スキルとの関係

	語彙 (スペル)	語彙 (意味)	読み
プリ	.399**	.494**	.508**
ポスト	.342**	.431**	.453**

単語の知識を測るために行っている他のテストで、スペルが理解できるテスト、および意味を理解しているテストと再話ができる力は統計的にそれぞれ有意な相関係数を有していた。またリーディングテストとの相関係数も有意であった。

(3) カリキュラム検証 (質的研究)

2012 年度卒業生に 2 年間の指導の最後にストーリーを使用した授業について自由に意見を書いてもらった。アンケートの使用については参加校の校長および担任に研究の主旨を説明し、個人情報への遵守と参加者の匿名性の確保を約束し、許可をいただいた。

分析方法としては、計量テキスト分析を可能にする KH Coder(樋口, 2013) を使用し、質的データにある種の数値化操作を加え、計量的に分析した。

図 1 は Joint Storytelling について児童が書いた感想に出ていた語彙のうち 5 回以上出てきた語彙を抽出し、共起ネットワークを作成した結果である。これより「英語」「思う」「楽しい」「覚える」「使う」「単語」が太い線で結ばれていることがわかる。これは多くの参加者が「物語りを使って英語(または単語) を覚えることは楽しいと思っている」ことを示唆している。また、音声言語の発達という観点から「言う」という単語を中心に見ていくと、「力」「読む」「伸びる」「思う」という語彙と強く結ばれている。これは彼らが「読む力と言う力が伸びたと思っている」ことを示している。

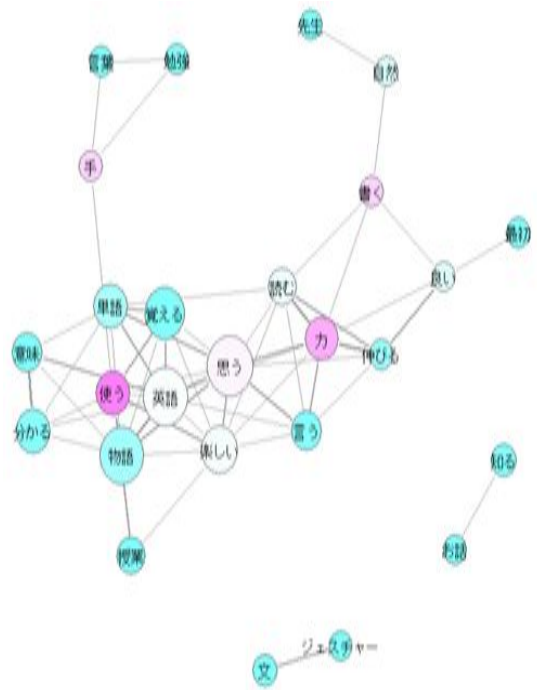


図1 KH Coderによる共起ネットワーク

実際どのように記述されているのか、抽出語彙のKWIC (Key Word in Context)分析から見ていく。ここでは「言う」と「発音」という語彙のKWICを分析した結果を報告する(ここでは児童が書いたまを引用している)。

- 大変だったけど、言う力・読む力・書く力・がのびたと思う。
- 劇を行って英語を言う力や読む力が伸びたと思う。
- 読む力は、あまり伸びていない気がします。でも、聞く力と言う力がとても強くなったと思います。
- 聞く力と言う力で英語の物語が楽しくできました。
- 読む力、書く力そして言う力も自分で伸びたと実感している。
- ぼくは、物語を使った授業で英語を言う力が特に伸びたと思います。なぜかという、いろいろなセリフを物語ですぐ覚えると思うからです。
- 英語を言うことや書く力につながると思いました。
- 物語を使うことで楽しく英語を言えたから、かなり嬉しかったし、たっせいかんがあったと思う。
- 英語を言う力が自分ではのびたと思う。だからおもしろかった。
- 最初は幼稚だなあと考えていたが、言葉や文が出てくるようになり、楽しくなった。
- 物語を使った授業は、発音・読む力がやりましたと思いました。
- 発音をほめられた時は嬉しかった。
- 発音の仕方などが分かってためになり

ました。

- 物語の中にでてくる単語や文章を楽しく覚えられたし、発音もしっかりとできるようになった。

以上のように共起ネットワークとKWICの結果より、参加者はこのカリキュラム、特にその中心であるジョイントストーリーテリングの活動を楽しみ、それを通してスピーキング能力(再話力)を身に付けていることを実感しているようであった。

以上報告してきたように、本研究において開発したSBCは児童の英語能力を伸ばす上で効果的であったことが判明した。毎回の授業では7分から10分程度しか取り扱わない活動である。20回行っても45分授業を4回から5回程度した時間に換算される。それだけの時間しかかけていないにもかかわらず、参加者は単語の受容的な理解を伸ばしていただけにとどまらず、orthographic knowledge(綴りに関する知識)を獲得し、統語的な気づきを伸ばしていたことがわかった。音声の発達の測定からもその効果が実証された。またその力がリーディング能力と関連していることがわかった。

さらに質的な研究から、参加者はSBCを通して英語を「言う」力を獲得したとして高く評価していることがわかった。当該カリキュラムを体験した児童は、物語を通してホールで英語を聞くことに慣れ、それを再話する活動を通して、英語を「学ぶ」対象として認識し、意欲的に学習に取り組むように成長していった。

参考文献

- アレン玉井光江 2010.『小学校英語の教育法 理論と実践』 大修館書店.
- 樋口耕一 2013. KH Coder 2x リファレンスマニュアル
- Freeman, Y. S., & Freeman D. E. (1992). *Whole Language for Second Language Learners*. Portsmouth, NH: Heineman.
- Goodman, K. S. (1971). Psycholinguistic universals in the reading process.
- Pimsleur, P. & Quinn, T. (Eds.) *The Psychology of second language learning* (pp.135-142). Cambridge: Cambridge University Press.
- Snow, M. A. 2001. 'Content-based and immersion models for second language and foreign language teaching' in M.

Celce-Murcia (ed). *Teaching English as a Second or Foreign Language* (Third edition). Boston, MA: Heinle & Heinle.

Vale, D., and Feunteun, A. 1995. *Teaching children English: a training course for teachers of English to children*.

Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

アレン玉井光江, 公立小学校におけるストーリーを中心にした授業の実践 音声言語の発達, ARCLE REVIE, 査読有, 8 巻, 2014, 46-55.

高橋奈央子, アレン玉井光江, ストーリーテリングが小学校低学年の英語学習にもたらす効果, 日本児童英語教育学会紀要, 査読有, 32 巻, 2013, 95-109.

アレン玉井光江, 公立小学校における Synthetic Phonics の実践, ARCLE REVIEW, 査読有, 7 巻, 2013, 68-78,

Mitsue Allen-Tamai, Phonological awareness and development of word knowledge among young Japanese learners of English, The Journal of Asia TEFL Special Issue, 査読有, 2012, 1-28.

アレン玉井光江, 公立小学校での英語教育についてのアクションリサーチ, 青山学院大学文学部紀要, 査読無, 53 巻, 2012, 37-59.

〔学会発表〕(計 27 件)

Mitsue Allen-Tamai, A holistic approach to teaching English to young EFL learners through stories, Asia TEFL 2013, 2013 年 10 月 26 日, マニラ (フィリピン)

アレン玉井光江, 小学校英語の可能性と教科化, 第 34 回日本児童英語教育学会全国大会, 2013 年 6 月 30 日, 大阪

Mitsue Allen-Tamai, The story-based curriculum for EFL young learners—from oral language to literacy development, Asia TEFL 2012, 2012 年 10 月 4 日, ニューデリー (インド)

アレン玉井光江, Storytelling で活性化される小学校英語, 第 38 回全国英語教育学会, 2012 年 8 月 5 日, 愛知

Mitsue Allen-Tamai, Hitoshi Yamashita, & Yuko Kaneko, English proficiency among young Japanese EFL learners, Asia TEFL 2011, 2011 年 7 月 29 日, ソウル (韓国)

Mitsue Allen-Tamai, The training

effect of phonological awareness and alphabetical knowledge on the word development of young EFL learners, Association Internationale de Linguistique Appliquee 2011, 2011 年 8 月 25 日, 北京 (中国)

〔図書〕(計 12 件)

卯城祐司, アレン玉井光江, バトラー裕子, 学文社, 『リタラシーを育てる英語教育の創造』, 2013, 183 ページ

アレン玉井光江, 小学館集英社プロダクション, 『Story Trees-ストーリーと活動を中心にした小学校英語』, 2013, 144 ページ

アレン玉井光江, 小学館, 『ABC actions』, 2012, 32 ページ

アレン玉井光江, 小学館集英社プロダクション, 『ストーリーと活動を中心にした小学校英語』, 2011, 152 ページ

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況 (計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

アレン玉井 光江 (ALLEN-TAMAI, MITSUE)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号: 50188413